国立国語研究所学術情報リポジトリ

「言語記事データベース」について：新聞記事を例に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-06-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 新野, 直哉
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003409

「言語記事データベース」について―新聞記事を例に―

2018.12.22　新野直哉　H6

1.「言語記事データベース」の意義

・「表現に対する意識」という観点からの探究を考えた場合、実例などを確認する言語的な集計資料だけでなく、コラムや時評といった、どちらかといえば風俗史的な資料を扱うこともまた考えていかねばならないと思われる。（梅林2012：79）

・{「わたし的」や「気持ち的」のような「～的」の新用法」に関し} 新聞や一般雑誌の記事の中で触れられている例は少なくないのかも知れないが、それらに当たるのは必ずしも容易なことではない。（金澤2005：92）

＊新聞、一般雑誌の言語関連記事は、当時の言語状況、言語意識を知るうえで有益であるが、データベース化が進んでいる学術論文と比べ、必要な記事を検索し、読むことは古いものほど難しく、埋もれたままになりやすい。新聞・　雑誌の言語記事データベースは、研究資料として意義がある。

2.「新聞記事データベース」の概要

◆言語記事データベースは新聞記事、雑誌記事（大正～昭和期の雑誌『文藝春秋』が対象）の二種類があるが、今回は新聞記事の分について説明する。

◆大正2・6・10・14年の『読売新聞』を対象とし、記事データベース『ヨミダス歴史館』収録の紙面の画像から目視により記事の採集を行う。

◆「ことばについての意識・意見・解説や、ことばをめぐる状況などを伝えている記事」が対象となる。

◆データはExcelの表。掲載日・面・段・記事名・執筆者等の基本データに、分野を示すコード、「語誌データベース」の検索キーとなるキーワードを付加。

◆4年分のデータがそろえば、分野による記事の増減という大正期における変遷も見ることができる。

3.「新聞記事データベース」を活用して得られる記事の例―大正２（1913）年の記事から―

○方言に関する記事

◆上司小剣（奈良出身の作家）連載コラム「小ひさき窓より」

「{田山花袋の小説に登場する関西女性のセリフに対し} 言葉も、調子も全で違つてゐる。{中略} 私は小説に現はるゝ地方語といふものに就いて、さう難かしく制限をしたくはないが、斯う言つた場合の女の言葉に、全く縁のない異つた地方の粗野な言葉つきを混ぜられると、興が醒めて了ふ」（5.25）

＊小剣の小説「鱧の皮」を、花袋が「大阪らしい気分が十分にはつきり出てゐ」る、などと絶賛し、小剣が作家としての地位を固めるのに大きく貢献したのは、この半年後、大正3年1月のことである。作家としての小剣・花袋の研究にとり重要な資料となる記事。

「現在行はれてゐる東京の言葉は、多くの地方語が混淆した上へ、葛西あたりの近郊から上総、房州の土語の加はつてゐるものと思はれるが、其の東京語にも少なからぬ野趣を含んでゐる」（11.30）

＊当時の東京語に対する（関西出身者の）意識を知る資料となる記事。

○国語国字問題に関する記事

◆浮田和民（当時、雑誌『太陽』編集主幹）「文章革命論」

『読売』が他紙に先駆けて平易な文体や振り仮名を導入したという話から筆を起こし、文章体の記事論説を全廃すること、さらに筆記用具を毛筆からペンとインクに切り替えること、最後には漢字の全廃とローマ字の採用を主張する。（11.17）

◆土岐哀果（ローマ字論者の歌人）「日本とローマ字」

ローマ字のヘボン式と日本式の違いを子細に説明し、後者の方が便利で優れていることを強調する。（12.28）

＊当時の「国字ローマ字論」等を研究するうえで有益な資料となる記事。

○外国人名の発音・表記に関する記事

◆無記名のコラム「卓子を囲みて」

劇作家若月紫蘭が童話『青い鳥』の翻訳権を原作者メーテルリンクから得た、と報じたのに続き、「尚ほ氏の手紙によると彼の名はメーテルリンクと発音するのが正しいので、マーテルリンクだのメターリンクだのと云ふのは間違つてゐるのだといふ」とする。（5.16）

＊この年の記事には、「メーテルリンク」「マーテルリンク」のほかに、ここには出ていない「メーターランク」「メーテリンク」「メテリンク」といった表記も見られる。今日の「メーテルリンク」という表記への統一の過程を解明するうえで参考となる記事。

○翻訳に関する記事

◆貝塚渋六（思想家堺利彦の筆名）「誤訳指摘の遣損ひ」

自身がある雑誌で坪内逍遥の翻訳ミスを指摘した中に、自分の方が誤っていた所があった、と謝罪しながら、改めて逍遥のミスと思われる個所を挙げる。（6.5）

◆大杉栄「Tradictore Traditore.―七死刑囚物語を読んで―」

相馬御風による翻訳本『七死刑囚物語』について、ロシア語の原著からでなく「実に恐ろしい不忠実なもの」である英訳版から重訳したために内容が大きく変わってしまっていることを、具体例を列挙して指摘する。（6.22）

◆広津和郎「拙訳「女の一生」の読者諸君に」

その代表的著作とされるモーパッサン『女の一生』和訳本の誤訳を数十か所列挙して詫び、翻訳作業を急がされ「時間の余裕といふものを少しも持たなかつた」ため、と弁解。（12.21）

＊いずれも当時の外国文学翻訳の実態がうかがえる、日本文学史・英語学史・英文学史研究の資料ともなる記事。

○一般市民の言語生活に関する記事

◆無記名「車掌の言葉△奇抜な答案二千通」

東京市電車掌のアナウンス文を一般から募集したことに関する記事。「直ぐ降りない方は中ほどへ願ひます」のような今日でも使えるセリフも紹介されている。（5.31）

◆無記名「ルナパークの滝」

当時の大歓楽街であった浅草公園内の「地の中へたばこの吸がら、ちり紙、たんつばをなすこと堅く禁ず」という制札に対し、「ハテたんつばをなすことの堅く禁じられたのはのみ込めるが、たばこの吸がらとちり紙とは、どうしてはナラヌといふのか、これでは文章上意義をなさぬ」と注文を付ける。

さらに、値下げをPRする映画館の看板に「與論の勝利」（「輿論～」の誤り）と大書していることを指摘し、「こゝにも公園文明の心もとなさよ」と嘆く。（7.6）

＊今日のSNS等に見られる、「街のおかしな看板」「街で見つけた間違い言葉」を紹介する記事の先達ともいえる、当時の市民の言語生活、言語（規範）意識を知る参考となる記事。

※参考文献

梅林博人（2012）「「全然」再考―迷信、アプレ、前提の否定など」『相模国文』39
金澤裕之（2005）「「～的」の新用法について」『日本語科学』17